

っても肝心の物がなかったから、皆戦時中と五十歩百歩の服装であった。完全に捨て去ったのは失恋鬘で、我も我もときそってパーマをかけた。

昭和24年お茶の水女子大学の第一回生を迎えて入学式が行われたが、地理学科の中に真赤なワンピースをきた学生がいて、少し大げさに云えば息が止まりそうにおどろき、つくづく“女高師は遠くなりけり”と思ったことであった。この学生は卒業後ずっとさる出版社につとめ、社内きつてのベストドレッサーであるそうなの。

このごろ感じたことなど

別 技 篤 彦

今年の春休み、私はホノルルでこんな経験をした。ホテルの一階にはたくさんの店が並んでいたが、そのなかに食料品店があり、その女主人は明らかに東洋系の顔だちをしているが日系人ではない。聞いてみるとフィリピン系の人であった。私はよくそこへよって果物やジュースを買ったものである。ある夜もその店にいと、派手な真赤なムームーを着た若い日本人の女性がとびこんできた。昨日あたりから旅行社の団体できている新婚組の一人にちがいない。彼女は女主人をみるなり、いきなり“おばさん おビール一本ちょうだい。”といったものだ。女主人は日本語が判らないのでキョトンとしている。日本人の花嫁さんはじれったそうにまたいった。“おビール。主人が部屋で待っているのよ。早くしてよ。”私は彼女に注意してやった。すると彼女は興ざめた顔をして、“なあんだ。ここハワイでしょ。日本語が判らないなんて呆れた人ね。”これには恐れ入った。ハワイはどこでも日本語が通じますなどと書いてある観光案内書にも罪があるが、花嫁さんはいったいどこの国に来ていると思っているのだろうか。“日本国ハワイ県。”という意識があるのだろうか。

× × × ×

私は講義その他いろいろな機会に東南アジアやインドその他のアジア諸地域の農民の考え方、その生活を支配している民間信仰や呪術、アニミズム的観念などのことを話す。そして感想をきくと、“とても信じられない。”という返事がかえてくる。私がウソ八百を並べているとでも思っているのだろうか。それでなければ、どうせ土人の低級な考え方、と軽蔑して問題にもしないらしく見える。伝統的な価値体系をたゞ無視し、破壊することこそ進歩した近代文明化だと信じている今の

日本人の多くには、純粋なアジア農民の心はとうてい判らないのではないかという気がする。それに今なお子供も学生も大人も“土人”という言葉を手軽に使う。その無神経さに腹が立ってならない。テレビでもそうである。“土人”という言葉に含まれる自己の優越感、他への軽蔑をよく考える必要がある。そういう思い上がった心を捨てないからどこでもエコノミックアニマルといわれてきられるのである。最近インド政府が日本の海外青年協力隊(JOCV)によこした要望書を見て私は心をうたれた。それには“インド社会にみられる特殊性、俗信、禁忌、祭の祝典その他を非難しないような人々に来てもらいたい、”とある。まさにその通りで、現地の文化、民衆の心をおもてに受容し、それとともに喜び、悲しめる心がまえの人こそ現地で望んでいることがわかる。富み榮えて心が貧しくなった今の日本人より、貧しいけれど純粋な信仰と伝統の豊かな心をもつアジアの民衆の方が人間として本当の道を生きているように思えてならないこのごろである。

人口移動論の一節

岸 本 実

人間の仕合せとは何か。人生論や幸福論についての書物は世の中に極めて多く、古今東西を問わずいつも論ぜられ、いつも考えつづけられている題目だと思う。そして人それぞれにそのニュアンスのちがいがあっても思われる。

仕合せと感ずる状態について、リービッヒの桶の理論を借用したい。リービッヒは著名なドイツの農芸化学者であり、肥料の研究からリービッヒの桶の理論を提唱した。桶はいくつかの彎曲した板をくみあわせ、これを束ねて底をつけたもの、桶の上端が揃っていなければ最も低いところから流れ出して、それ以上その桶には水は溜らない。これをリービッヒは肥料の要素にたとえ、窒素・リン酸等々のうち一つだけその量がどれほど多くても肥料の効力はなく、最も少ないものを基準としてその効力があらわれると説いた。人間の仕合せもこれにたとえられはしないだろうか。いくらお金があってもそれだけでは仕合せとはいえないし、名誉や地位だけでもいけないし、よい生活の伴侶が必要だし、よい子宝にめぐまれることも必要であろう。昔からよくいい古されたことばに、若い男女が相思相愛となり結ばれようとした時には、茅の柱に茅の屋根でもよいただ2人だけが結ばれば何もいらないと本当に心から思い、互に語り合う。しかしいざ結婚してみると、適当な家もほしいし、金もほしいし、ほしいものだらけ。そこに不満が出、不仕合せだと感ずるようになり、だ